

## 周辺からの記憶 47

# 2022 年度シンポジウム

村本邦子（立命館大学）

3月、広島で開催された「戦争記憶の国際比較研究会シンポジウム：いま、なぜ、どのように戦争記憶を研究するのか」に参加した。1日目は「原爆トラウマの世代間連鎖」と題して、原森泉さん（ミキコ・ピースカフェ主催）と平尾直政さん（きのこ会）のお話と映画上映、2日目は、「集合的記憶論の位相—いま起きている戦争や虐殺のなから考える」と題して、岩崎稔さん（東京外国語大学名誉教授）の講演があり、その後、研究会メンバーで今後の方向性を議論するミーティングがあった。いずれもとても興味深い、驚くべき内容だった。

山内幹子さんは広島で被爆し、同級生の「全滅」を経験し、「胎内被爆者」の中に、頭や身長が小さく生まれ、知的障がいのある「原爆小頭症」の人がいるというデータをABCC（原爆による傷害の実態を調査記録するため、アメリカが原爆投下直後、広島に設置した研究機関）から持ち出した。2019年、89歳で山内さんが亡くなった後、内部告白の証拠となるメモが見つかり、マスコミが大きく報じた。



NHK 薄れる記憶「内部告発の真実—生き残った  
負い目と葛藤と」（2020年2月2日）

[https://www3.nhk.or.jp/news/special/senseki/article\\_107.html](https://www3.nhk.or.jp/news/special/senseki/article_107.html)

山内さんの長女である原森泉さんは山内さんの長女だが、母は「自分だけ生き残った負い目から使命としてやったのではないか」と言い、母の遺志を継ぐピースカフェを主催している。その背後で自分は子ども時代に不適切な養育を受け、その影響に今も苦しんでいるということを「原爆トラウマの世代間連鎖」として語った。辻内琢也さんは「（フクシマ型 PTSD あらため）原発災害型 PTSD」という言葉で原発事故被害者の苦悩を描き出している。PTSD を個別化していくのがよいのかどうかはわからないが、それだけ固有の苦悩を生み出すということである。想像を越える重荷が次世代に背負わされていく。

## シンポジウム「被災と復興の証人 セカンド・ステージへ ～ 11年の語りをつなぐ ～」

2022年12月3日13:00-17:30に、ZOOMで現地とつないで、2022年度「日本・家族応援プロジェクト+」シンポジウム「被災と復興の証人 セカンド・ステージへ ～ 11年の語りをつなぐ ～」を開催した。

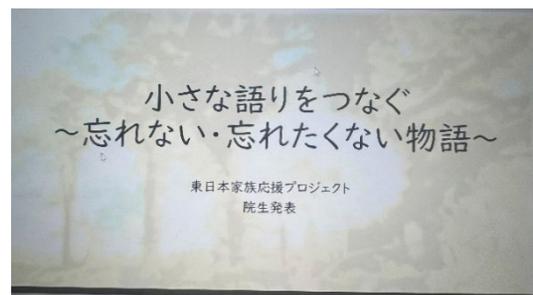
初めに森岡正芳研究科長より挨拶を頂いた。「震災直後から東日本各地へ赴き、現地の方々のご協力を得ながら多様な取り組みをし、毎年、このようなシンポジウムを開催し、院生たちの大きな学びとなっている。11年目に入り、震災の記憶を風化させない、セカンドステージへと転換する大事な年である。このプロジェクトには、記憶と物語る行為という観点からも深い意義を感じている。被災と復興に関わり、記憶は当然一人一人異なるものであるが、それを思い起こし、語り合うことで語りが新たな意味を持つ。どのような場面で、誰とともに記憶を語るのか、それによって記憶に新しいものが加えられ、変容していく」と、ご専門のナラティブの観点から本プロジェクトの意味について話してくださいました。

### 第一部「小さな語りをつなぐ ～ 忘れない・忘れたくない物語～」

まず村本より、プロジェクト概要と企画趣旨を簡単に述べ、第一部「小さな語りをつなぐ ～ 忘れない・忘れたくない物語

～」として院生たちが報告を行った。今回はシンポジウム企画委員を決め、井上颯大さん、曾佳荷さん、土生美枝さん、濱本良枝さんが企画をまとめ、司会も引き受けてくれた。

初めに、今年度の現地プロジェクトの内容を動画にしながらわかりやすく紹介した後、17人の院生たちが、心に残ったことを3分ずつの語りとスライドでつなぐという構成になっていた。それぞれがさまざまな出会いを深め、言葉にし、それらがひとつの物語を成していく様は感動的でもあった。院生たちの企画は素晴らしかった。



**語り継ぐ**

世界でも未曾有の大災害、東日本大震災。震災から10年が過ぎていき、年月が経つごとに、震災の事を知らない子供たちも出てくる。

被災した子どもたちにとって、また、原発事故によって健康被害を受けた子供たちにとって、その親にとって、不安な長い人生が続いていく。また後継がない復興の中で、必死に生きておられる姿を、証人として見て、聴いて、感じ深く考えてきた。

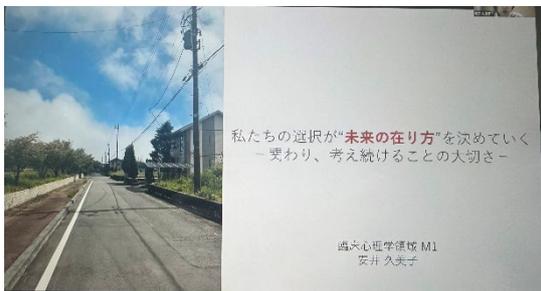
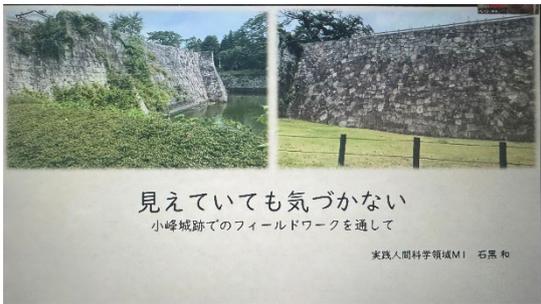
親として、まず私は、これから日本を生き抜いていく身近な子供たちに、この目で見てきた真実を伝えていくことから始めたい。

そして、これからも、その体験を忘れずに、繰り返し語り継いでいきたい。

**伝承の持つ意義**

- ・末の松山には波に関する伝承が多い
- ・末の松山には波が来ないのを前提とした短歌などがある
- ・実際に、東日本大震災の津波で末の末の松山は浸水していない
- ・災害に関する伝承は他にも多くある





## みなさんからのコメント

### 黒川恵子さん（宮城県多賀城市おおぞら保育園園長）

多賀城市に住みながら末の松山に津波が来なかったという話は、恥ずかしながら、今回の院生さんの発表で初めて知りました。語り継ぐという言葉が何度も出たけれど、それによって救われる命があるのだと思います。細く長く続けることの大切さ。阪神淡路大震災があっても、まさか自分かと思ってたが、丸山さんの言葉にもあったように、いつどこで起こるか分からない。自分事として考えていなかったことを考えていかなかったことを反省しつつ、週明け、また今日の話職員みんなにシェアして語り継いでいきたい。

### 小磯厚子さん（福島県白河市 NPO法人しらかわ市民活動支援会 おひさまひろば 副代表）

とても興味深く聞かせてもらった。この十年、みなさんに東北に来続けて頂けることが本当にありがたい。阪神淡路の時、長女が生まれたばかりで、あの時はいろいろ考えたし、被災地に行った夫から大変だったと聞き、忘れないようにと思いながらも、記憶から薄れていった。人の記憶とは、そういうもの。来てくださった方も、少しずつ薄れていってしまっているかもしれないが、毎年、どなたかが来てくれて、それをまたどなたかにお話しくださっていること、それが嬉しいしありがたい。

白河は去年からだ、EMANONの高校生主体でも関わってくれた。白河には大学がないけれど、白河で大学院生と関われる

ことは、震災に関係なく、よい刺激になっている。

続けて欲しいと思う理由は、当時、高校生の時に浪江で被災して、避難してきて、今は母となって広場にきている人がいる。あまり触れないように気をつけてきたけれど、たまに少し触れても多くを語らず、私の家は土台しか残ってないというぐらいで、もしかしたら、まだ多くを語れない時期なのかなと感じている。みなさんの活動を長く続けてくださることによって、言いたいよ、聞いて欲しいのよという時期がきた時に、みなさんが来て聞いてもらえたらと願う。

みなさんの発表を聞いて、伝承館、私も行ったことないのよねとっていて、勉強になりましたし、これからも未来に繋げて行って欲しい。

### 西島香織さん（福島県いわき市原子力災害考証館Furusato事務局）

小磯さんの話を聞いていて、涙が出そうになりました。みなさんが見てきたものの報告に共感することが多い。私は移住者で、埼玉県から3年前、富岡に引っ越してきた。0歳児と3歳児を育てています。

考証館は、被害者での立場からの展示、血の通った展示をコンセプトにしている。当事者の側からの声がみなさんにダイレクトにつながったのかと嬉しかった。

誰もが故郷を失わない、故郷へのリスペクト。故郷という言葉は、原発以前の話として誰もが共感できるのではないか。そんな思いを込めてFurusatoと名づけられている。近くにいてはわからない、当事者だから言えないこと、遠くから、外からの新鮮

なまなざしで見ても、問いかけてもらえれば話せることもある。日常的に建物が取り壊されている現状があるけれど、決まったポイントで見た人の眼に留まるもの。

報告のなかで、大阪の方が原発災害について自分が考える立場にあるのかというような言葉があったが、地域は関係ないと思っている。双葉郡の中にも、賛成した人、反対した人、いろんな思いを持っている人がいるし、外から入って来た人もいる。距離や当事者かどうかなど関係ない。みんなが当事者だし、この問題に思いを持つ人がつながってやっていけるといいと思う。

#### 大平悦子さん（岩手県遠野市 語り部、日本民話の会会員）

みなさんの元気な顔を見れて嬉しい。若い人たちの発表を聞いて心を打たれました。十年過ぎた震災に、今なお関心を持ってくれていることは何てありがたく嬉しいことか。

また、発表の表現方法がおもしろかった。17名が3分ずつという短い時間でお話くださったので、それぞれに思いが詰まっていたのだと思う。だからこそ、なお一層聴き手に届いた。すごくおもしろい発表だった。聞いていると、とりわけ迫ってくる表現があり、タイトルがちょっと変わったりインパクトあったりする。たとえば、『私達ができる0.1%のこと』って何だろうとか、『上海と東日本をつなぐ』とか『見えていても気づかない』、『いわきの街角にて』などなど、タイトルがすごくおもしろくて、写真1枚のインパクトで伝わってくるものが違うものだと思いながら、素晴らしいと思いながら聞かせてもらっ

た。

被災地に新しい建物があると、ここには津波がきたんだなと思ふことなど、被災地を回るたびに複雑な思いで見ると同じ思いで見てくださったんだなと嬉しかった。

私は民話に関わってきましたが、今回のような震災の出来事がみなさんのような方を通じて伝えられていく、また、後世に民話として人々に伝わっていくのかなと思ふ。みなさんには、これからも、東北、東日本大震災、福島のことにも関心を持ち続けてもらいたいと願っています。

#### 森岡先生（研究科長）

驚いた。これまでも何度かシンポジウムに参加させてもらったが、今年の大学院生たちの体験の深め方、従来のさまざまな知識や理論をもとに現場を読んだり書いたりするのではなく、みなさんが捉えたその場において見やり感じ取ったことを、現地のみなさんのご協力のもとで、自分の言葉として立ち上げたことがよく伝わってきた。ひとつひとつが新たな発見で、それを協働で立ち上げていく。現地の人との協働の中で、実践知とか、ローカルな知とかいう専門用語がよく使われるが、そういう言葉が空しくなるくらい感動した。それぞれの人達の生きる感覚があったのでしょ。是非、さらにこういう場を、研究科のなかで、ゼミや授業など、新たなところでも報告されるとあらたな発見があることであろう。現場に出て学ぶということの中核になることだと思った。あらためて現地のみなさまにも感謝申し上げたい。

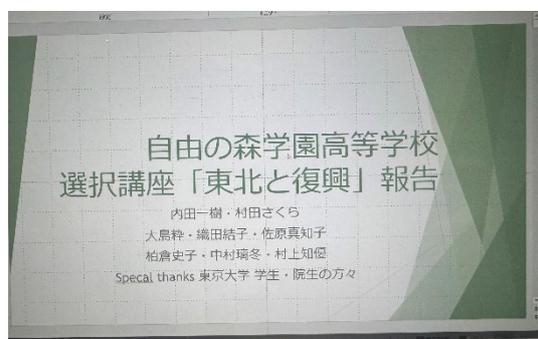
また、Hさん（医者）から「震災の被害に遭った人の外傷性記憶は、思い出の記憶になっていかないものだが、こんなふうには、社会で記憶が共有されていくことによって、トラウマティックなものが希釈されていくのではないだろうか。個人にとっても、社会にとっても治療的意味があるのではないかという印象を受けた。森岡先生の考えをお聞かせいただきたい」との質問があり、次のように答えられた。

おっしゃる通り、さまざまな専門の立場から現地の記憶が扱われる。一人一人の体験は違うもの、それを一般化してトラウマとして治療のプロセスを論じるつもりはありません。たしかに、思い出として語れない。思い出として語るのには、距離をもって語る。個人差や体験の違い、状況の違い、誰がどのように関わったかなど、さまざまなことが関わっている。

体験や記憶に個人差があるのは当然だが、メモリアル、祈念するというのは、本来は大切な社会の装置であり、文化や歴史の中にある。5万年の人類の営みの初期から何がいちばん人間的なのかというと、弔うということである。人骨が見つかる、そこにさまざまな植物の種の化石もある。5万年前から、人類は花を手向けて弔うということをしてきた。それは遺伝子として、社会的遺伝子として受け継がれてきた。祈念する、弔い、十年のスパンで見ていると、いろいろなものを見てきたわけですが、このプロジェクトも、みなさまの協力のもと協働的な祈念の形としてあったのではないかと思う。それは、いろんな人に波及的な力づけになっていくと思う。それが今日の基盤にもなっていた。

## 第二部 「各地の現在いまをつなぐ ～そして未来へ」

休憩をはさみ、第二部は、「各地の現在いまをつなぐ ～そして未来へ」と題して、修了生、院生、教員による活動報告が行われた。休憩時間には、企画委員の院生たちが制作してくれた美しく、楽しく、おいしかった心に残る風景を重ね合わせた動画を流した。



### 内田 一樹さん（修了生、自由の森学園中学高等学校 社会科教諭）と高校生たち

内田さんはプロジェクトに参加した修了生で、現在は自由の森学園で教員をしているが、勤務先の高校でも東北のプロジェクトを実施したいと暖めていた企画を選択科目「東北と復興」を実施できたということで、内田さんと高校生7名、連携した東京大学の学生たちが報告をしてくれた。

内田さんは2015年にプロジェクトに参加し、石巻を訪れた後、2016年、熊本地震が起り、実家が半壊となる経験をした。十年目のプロジェクトシンポに参加した時、「私たちには11年目も12年目もあるんだ」というのを聞いたり、その後、コロナ禍を経て、2その時の10月に増田先生と石巻を

訪れた時、現地の方が、今の復興具合を聞かれて「震災前を10としたら、まだまだ5か6だね」と言うのを聞き、まだまだこれから復興に向けて考えていく必要があるなと考えて、2022年4月にこの講座を開講した。自分は社会科教員で、民主主義や自由、市民、ケアをキーワードにしている。教育哲学者のガート・ピースタという人が、民主主義を考えるうえで、舞台に立っていない人の声、言葉にならないうめき声を聞く、耳を傾けるというのが教育において大事だと言っている。それをやりたいと思った。通年で週1回、高校生20名が参加し、東京大学の大学生、大学院生5名が協力してくれているとのことだった。

その後は高校生たちの発表で、初めに自由の森学園の紹介があった。テストはなく、百種類近くの選択講座があり、そのうちのひとつが本講座である。

それから9月に行われた3日間の石巻スタディツアーについての報告があった。1日目は石巻ニューゼ、門脇小学校震災遺構に行った。きれいなところだったが、写真を見て震災の被害を感じた。頭ではわかっても実感がわからないという不思議な体験をした。その後、南浜・門脇地区ツアーを行った。このあたりは家を建ててはいけないところになったと知って、復興とは建て直すことだと思っていたが、変化をしていくことも含まれているんだと再認識した。町を歩くと人と会うこともなく、生活感が感じられない、行ってもいいが住んではいけないという危険地区の境界はどのように決めるのか、また震災が起きたら危険地区が拡がって住むところがなくなっていくのではないかということ考えた。

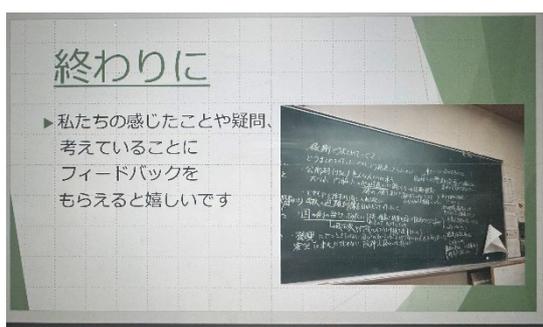
2日目はみなと公営住宅や移動支援を行っているNPOであるReraさんとの交流会を持った。「高齢になって被災してすごく大変だった」という言葉に衝撃を受け、現地の人たちとの交流が大事だと思った。石巻に住んでいない自分たちは今後どのようにつながっていけるのかとモヤモヤが残った。

3日目は、大川小学校の遺構を訪れ、周辺を歩いた。津波で子どもさんを亡くして語り部をしている方の話を聞いた。教員の指示に従い校庭で待っていた子どもたちのほとんどが亡くなり、逆に自分で逃げた子どもが生き残ったという話を聞き、避難訓練やマニュアルの意味がよくわからなくなった。結局、非常時には自分で判断して逃げろということなのだろうか。マニュアルがあることで冷静にできるのか、あるいはそれに縛られて柔軟に動けなくなるのか。避難訓練やマニュアルについてどう考えるか意見が聞きたい。もうひとつ気になったのは、大川小の責任を語り部の方は学校や市が一方的に悪いような言い方をしていたこと。そのような話を受け留めつつ、実際にはどのような避難指示がなされたのか、市の言い分も聞きたいと思った。

その後、ツアー終了後に授業で「3.11子ども甲状腺がん訴訟」のことについて、訴訟弁護団の北村賢二郎弁護士をゲストに学んだ。原告のAさんにもお話を聞いた。甲状腺がんは年間100万人に1人か2人しか発生しない珍しいものだが、原発事故以後、福島で38万人の検査で300人以上と多発している。

原告はがんになった若者たち7名。自分以外の300人のがんになった子どもたちの

ために訴訟している。国連科学委員会は因果関係を否定している。好きな仕事ができない、恋愛・結婚しづらい、がんの再発・転移があるのに、メディアが取り上げてくれない。福島では話して欲しくない話題となっている。原告たちは差別や誹謗中傷の不安から顔出しはしていない。本当に因果関係はないのだろうか、可能性は低いというのは可能性があるということ、検査は福島だけでいいのか、これだけの被害をだしたのに原発を再稼働していいのなど疑問を感じた。私たちの疑問にフィードバックがもらえると嬉しいということだった。



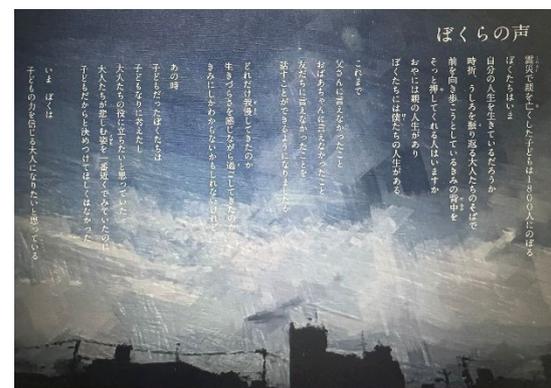
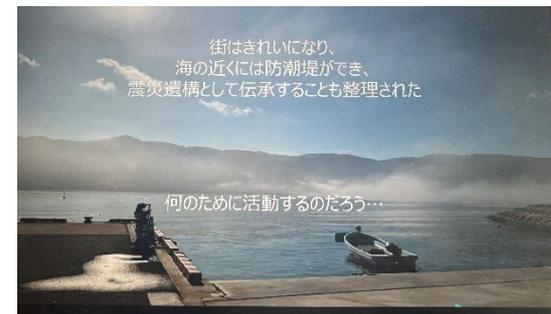
若い世代が現地のことに関心を持ち、現地を訪れて声に耳を傾けることは現地の方々、また私たちの希望だと思った。

## 増田梨花さん（人間科学研究科教授）と 小笹大道さん（博士課程前期課程2年）

まず、小笹さんより報告があった。小笹さんは、立命館の付属校である中学高校で教員として、2011年に震災復興プロジェクトを立ち上げ、最初は教員でボランティアとして石巻に行っていた。本研究科に入学して、このプロジェクトに参加し、それらをつなげられないかと思っていたところ、今年、増田先生と石巻にて実現することが可能になった。

何のために活動するのだろうと考えながら活動した。絵本と音楽のコラボ、わたせせぞうさんのトークショーを実施し、参加された方から感謝のメールが届いた。先ほど小磯さんが言うておられたように、このような機会を作ることが自分の心のなかにあるものを表出する機会になっていくのではないかと思うようになった。門脇小学校にあった「ぼくらの声」という詩が忘れられない。言葉で出せていない子どもたちがたくさんいるのではないか。言葉には力がある。それを出せることを待っている人たちがいる。だからこそ行動する必要があるのではないかと考えるようになった。

続いて増田さんより、2011年から石巻、女川を訪れて、絵本と音楽を使ったイベントを実施してきたことの紹介があった。遊ぶこと、寝ること、食べることの大切さと、それができない状況のなかで、絵本や音楽を使った活動を行い、社会的交流によって心の健康を回復することを目指してきた。絵本と音楽を臨床心理学に活かしている。最後に絵本を閉じて「おしまい」として非日常から日常に戻ることも力があると思う。



青森県むつ市から眞手忍さん（青森県むつ  
児童相談所こども相談課課長）

眞手さんからは、むつでのプロジェクトを振り返った。むつ市は震災の直接的影響は大きくはないが、やはり影響を受けたところから、家族を応援するのだという主旨で続けてきた。家族応援セミナーでは、限られた情報から家族の強みを探す練習をした。家族のことを知ることで自分が支援になるんだと学んだ。それぞれの支援者たちの気づきがあっただろう。地域の家族力をアップしていく。市町村の職員を対象にした研修を続けていきたいと考えた。要保護再作支援会議だと、今すぐどう解決するかということが求められるため、そうでない形で皆で考える機会が重要だと考えた。むつには1つの市と6つの町村があり、2回にわたって研修を行った。参加者の反応も良く、次年度からも引き続き事例を使った演習を続けることで地域の支援の力につないでいけたらと思っている。

団先生の漫画展も評判がよく、来年度以降、虐待防止月間に引き続き実施していきたいと準備中であるとのことだった。

むつでつなげてもらっていることに感謝である。



岩手県宮古市から斎藤清志さん（宮古市企  
画部田老総合事務所所長）

急な仕事で参加できなくなったため、ビデオレターの形で、宮古の海を背景に動画を準備してくださった。

後にあるのは三王岩で、津波でも倒れなかったものである。住宅はかなり被害を受けたが、自然のものは強いんだなと思わされた。宮古市田老地区は、震災後、人口が約6割まで減少し、高齢化率が44%を越えている。これから三王地区でコミュニティの活発化をしようとしていたところでコロナ禍がきて、十分にできないことが問題になっている。高齢化で後継者がいないことも問題になってくる。田老地区を少しでも盛り上げていくには、他の地区のみなさんと交流することが必要だと思っている。道の駅では特産物の販売をしたり、食堂もある。多くの皆さんに来てもらうことが活性化につながると思うので、是非いつの日か訪ねて欲しいとのことだった。



宮古から佐々木 純子さん（一般社団法人  
宮古観光文化交流協会学ぶ防災ガイド）

佐々木さんもビデオレターの形で、博士課程の河野暁子さんがインタビューをしてくれた動画を流した。

佐々木さんは、新しくなった防潮堤のうえで、今年がウニがこれまでの歴史のなかで一番だったと嬉しそうに話してくれた。昆布がウニの餌になるが、水が低温で長生きして、エサがずっとあったためにウニが最高に採れたということで、漁師さんたちも喜んで笑顔が戻ってきたという。

学ぶ防災もコロナでしばらくガイドができなかったが、ようやく、学校からも来るようになり、従来通りに追って来て、元気をもたらしている。立命館大学の先輩方が作ってくれた街の模型は宝物で、それを使って説明するので、私たちの命の次に大事なものになっている。立命館大学の皆さんとまた近いうちに会いたい、待ってますということだった。



宮城県多賀城市から丸山隆さん（多賀城市  
教育委員会生涯学習課副主幹）

丸山さんからは、今日は最初からずっと聞かせてもらって感動している。とくに、防災士になったというのには感銘を受けた。

多賀城市は市の三分の一が浸水し、かなりの被害を被った。十年経った今、まったくその気配が感じられないくらいに復興し、新たに来た人にはその痕跡も感じられない。地元の人にとっては、こんなところには住めないと思うところに、今は新しい家がびっしり建てられている。そういう意味では、すべてが忘れ去られていくと思う。

震災後、地震・津波の防災訓練を続けているが、市役所の職員も三分の一はすでに経験がなく、小学生にいたっては全員震災の経験がない。そのくらい時間が忘れ去らせてしまう。そのなかでこのように11年通って頂き、感謝の思いでいっぱいである。今年はプラスということで、黒川先生と力を合わせて、自分たちが主催するということで準備させてもらった。団先生の漫画展、講演会も60名ほどで囲むことができた。

プラスということで、多賀城に隣接する塩釜や利府など、利府三町と言われるように、もう少し目線を拡げてやっていけるといいのかなとも思っている。

東北のことを知りたい、被災地のために何かしたいという声があったが、こプロジェクトを通して、最後は自分を応援するのかなと、何のために行動するのかという声もあったが、自分の命を守るために役立つ

て欲しい。いざという時、自分自身が矢面に立った時に行動できるならば、東北の被災も活かされる。知ること、自分のことに置き換えられるようになってくれることを願っている。



#### 仙台市から小野和子さんと加藤恵子さん (みやぎ民話の会)

こちらもビデオレターの形での参加となった。

小野さんから、2011年の夏に民話の学校を開いた。語りを聞かせて頂く予定だった語り手6名全員が被災された。奥様を亡くしたり、お兄様を亡くしたり、家屋、田畑を流されたりなど全員が大切なものを失った。その体験を語ってくださった。大変だったろうに、みなさんが明るくその体験を語られた。明るくと言っても、涙を流されながらということもあったが、それでも、みなさん、聴き手に苦しみを与えないというかのように優しく語ってくれたことが忘れられない。そこには、語り/聞くという姿の原点があったように思う。何かが起こった時に、周りの人から言葉をもらって記録するということの大切さを思った。

それをしないと、大切なものが消えていく。その場にいた人たちのせつない、その言葉を記録することをして欲しい。そういう人が一人でも二人でも出てくれることを願っている。

加藤さんからは、9月にお会いして今年も終わろうとしているが、嬉しいことに、鶴野先生から小さなお話を語り伝えようという活動を始められたということで、私もやってきたんだよという話をしたい。

昔勤めていた小学校や近隣の小学校から、3回語ってちょうだいと言われて、語りに行った。そこで語ったのは、宮城県の随一の語りであったナガラウさんが語った本当に小さなお話。昔、名もない男がいて、化け物退治をすることになった。角が出て、目がキラキラ光っていて、口は耳まで裂けていて怖ろしい怪物で、男の腕をガブッと噛みついた。ところが痛くもなんともない。あれと思って口を裂いてやっつけて村に戻った。村の人たちが驚いていると、男は「なあに、化け物は歯がなかったんだ。ハナシさ、ハナシ。おしまい」（実際には土地の言葉で語ってくださったが、再現できないので意味内容のみ）。子どもたちは、最初、怖そうな顔をして聞いているけど、最後までいくと「何それ？」って顔をしていたが、一人の子が「ハがないからハナシじゃないの」と言うと、みんな笑った。そんなふうに子どもたちが興味を持ってくれる。

こんな活動をできるようになったことが嬉しい。また仙台まできてくださることがあったら、こんな話を語ってみたい。



**福島県白河市湯澤魁さん（一般社団法人未来の準備室 理事兼事務局長）+参加した高校生たち**

湯澤さんからは、出身は西宮で関西のみなさんにつながるのが嬉しいとのこと。私は中学3年の終わりが3.11のタイミングだったが、高校1年生の頃から東北に通うようになり、当時の衝撃を鮮明に覚えている。阪神淡路の経験を見直したり、文化祭で東北の展示をしたりしていた。

現在は白河市に移住し、コミュニティ・カフェEMANONをしている。若者と被災地の関わり、居場所がテーマ。自分自身、10年ほど福島に通い続ける中で、カッコいい大人にたくさん出会ったし、憤りを含めてたくさんの思いを共有させてもらった。当事者に近づきたい、もっともっと被災者

の方たちの気持ちを理解したいと思って福島に住み始めたが、十年のタームで見た時に、自分自身も復興の一員だったと最近、気づいた。受け入れて頂いた福島のみなさんや、こうやって居場所を一緒に作ってくれている高校生たちに感謝している。

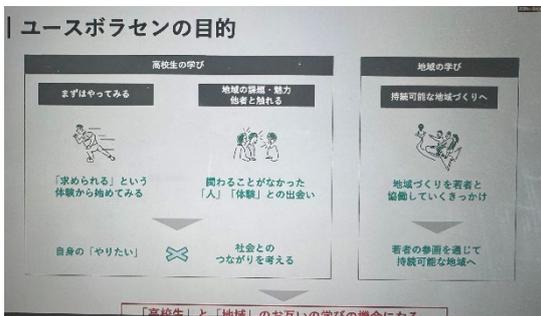
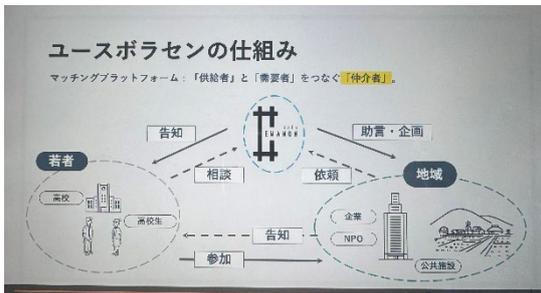
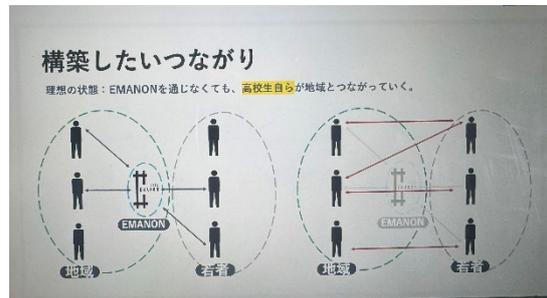
白河で言えば3.11で土砂災害があり、死者を出したその防災復興祈念公園を利用して、つい先日、EMANONの高校生が「そなキャン（防災にそなえるキャンプ）」という企画をやった。地元の方が30名ほど集まり、防災施設はあっても非常時に使えないとか、鍵がどこにあるかわからないなど、そういう問題が明るみになったことがあり、高校生がやったことの意味があったと感じた。

ボランティアということに注目している。自分自身がボランティアに通うなかで居場所をもらったように、高校生も地域に出て、ボランティアをするなかで居場所をもらう。居場所ができたところで、今度は自分が何かやってみるということが自己実現につながっていくと思っている。ユースボラセンのセンターを勤めていて、小磯さんのおひさま広場や立命館のプロジェクトにも参加させて頂いている。過去2年にわたって協働させて頂いた。

去年参加した高校生、今年参加した高校生が今日は来てくれているので、コメントをもらおうと思う。

**湯澤 魁**  
YUZAWA Kai

一般社団法人未来の準備室 理事  
1995年札幌生まれ  
幼少期を広島で過ごす  
西宮(兵庫)出身  
灘高校→明治大学政治経済学部 卒  
3.11震災を契機に、東北・福島へ

**高校生に伝えたいこと**

**まずはやってみる！**

**自分が求められるんだ」という体験から始まっていく**

・まずは行動してみる事が大切。勘いてみることがたくさんある。  
「失敗してはいけない」というマインドセットからの打破をしてもらいたい。やりながらその感覚を掴み、「失敗上等」「失敗なんてそもそもない」のマインドセットへ。

**他者との出会い**

**他者を通じて、「信頼」「社会のモヤモヤ」を体験する。**

・真摯に取り組む大人たちの考えや感じていることを正直に伝えて、「こんな人になりたい。」と考える機会になってほしい。そして、地域や社会の課題を自分の当たり前にすることで「これはおかしい。」を考える機会もあってほしい。

**高校生A**：昨年、このプロジェクトにボランティアという形で参加させてもらった。子どもとの関わり方を学びたいと思って参加した。そこはもちろんだが、関西から立命館大学の院生や先生方が来てくださって、さまざまなことを話してくれたことが、自分のなかでいろいろ考えたり深めたりするきっかけになって、自分のなかの大事なものになっている。これからも続いていくコミュニティを作っていけたらと思う。

**高校生B**：今年、このプロジェクトに参加したきっかけはEMANONさんだった。最初、ボランティアを紹介してもらって、ボランティアを重ねる中で、人との関わりがすごく楽しく感じるようになった。いろんなことに挑戦してみようという意欲が湧いて、今回、このプロジェクトに参加した。子どもたちも家族もプロジェクトを見

ていて、震災という辛い事実があっても、一所懸命、復興ということで乗り越えようとしていて、地元の人たちも一緒懸命それを支えようとしている姿を見ていて、昔は東京とか都会に憧れていたけれど、地元の良さ、魅力が今回のボランティアを通じて理解していったと思う。

**小磯厚子さん（福島県白河市 NPO法人しらかわ市民活動支援会 おひさまひろば 副代表）**

ここ2年間、EMANONさんと協働で立命館のプロジェクトを手伝ってもらってきた。白河は小さい小さい町なので、高校生が今、言っていたように、他とつながる機会がなくて、どうしても高校生や私たちは都会に憧れてしまう。自分たちの魅力を外から見る機会がない私たちにとって、みなさんとの関りは、震災復興っていろいろあると思うが、こんなふうに新しい角度の見方をもらえるということも復興の形に貢献すると思う。

この十年を振り返ってみると、私の子育て支援の変場はほとんど変わっていない。子育て中のママたちは、当時は、洗濯物を外に干せるか干せないかとか、食べ物に対する不安とか、放射線の心配があった。たとえば、今日来てくれた高校生Bさんは、小さい頃、この子育て広場に来てくれていたが、その時にママたちが思い悩んでいたことは大きくは変わらない。

こういう活動を介して、まだ話せる状態になっていない人や、当時、子どもでよく

「わからなかった人たちが、今後、ママになり子育てしていくなかで、また話したいときにそんな場になって欲しい。

私自身、当時避難しなかったことをどうだったのかと思うこともあるが、やはり、地元の良さを見ながら、いろいろな関りを今後も続けていけるといいなと思っている。

先日、浪江に行った。請戸川は鮭が毎年あがってくるというので一度行きたいなと思っていた。ようやく行けたので、ずっと川を見ていたが、もちろんそれはなくて、道の駅で聞くと、「もう放流してないからね、震災後まったく見てない」ということだった。川は元のままそこにあっても、人が努力してきたことが一回止まってしまうと、それを戻すのは「なかなか大変なんだな」と感じて来たところだった。

先程の自由の森学園の生徒さんたちの問いについて思うことがいろいろあるが、表面上は前向きで明るくても、心のどこかに心配や不安を抱えている状態なのかなと感じている私だ。来年も是非、一所に何かできたらいいなと思っている。



### 第三部 交流会

第三部では、関係者に短いメッセージをもらい、その後、ブレイクアウトルーム（15分×2回）で交流をしておしまいとなった。

#### 団士郎さん（立命館大学客員教授）

院生たちの発表を聞いて、準備のプロセスも見ていたので、ハラハラするところもあったが、みんなで協力して、ひとまとまりにして届くように完成させたことには、いいなあと思って聞いていた。良い本番だった。

聞きながら思ったこと。今日、初めて思ったことだが、十年以上東北に通って、シンポジウムをやって、院生たちが一生懸命学んだり調べたりして発表してくれることと、現地に暮らしながら十年の変化を体験している人たちとは違うと思った。

私は漫画家として取材をしたくないので、できるだけ受動的にいたいと意識している。漫画家として取材して、メディアにのせて、作品を発表していくというようなことをしないよう強く戒めているところがある。じゃあ何がしたいのかと言うと、自分でもよくわかっていないところがあった。

今日初めて、そうか、毎年その時期のスナップショットを1枚だけ持って、また1年後に行くということを十年を続けるというようなことは、誰もやらないなと思った時、このみなさんとはそれを共有しているわけだが、村本さんが最初から言っている証人になるというのはそういうことだな

と思い、それが自分がやりたかったことだなとあらためて思ったところだった。



#### 中村正さん（立命館大学教授）

私はむつにずっと関わっていた。虐待やDVなど暴力のことをやっていたので、続けていきたいという眞手さんの言葉を嬉しく聞いた。むつでもそういうことをしていたが、自分としては、むつだけ特別というよりも、あちこちで続けてきたことである。30年以上続けてきて、暴力問題が変わらないことは残念なことであるが、それしかないのかなと思いつている。

今日は、プロジェクトの広がりがわかってよかった。



### 鶴野祐介さん（立命館大学文学部教授）

今日はとても良かったと思う。とくに、院生たちが第一部の小さな物語をリレーでやってくれたのがよかった。

ビデオメッセージを語ってくださった小野和子さんは、先日、ご主人を亡くされて、その時に思い出されたわらべ歌があったと言う。「ひとりじゃ寂し ふたりで詣りましょ」と始まる数え歌になったわらべ歌で、まりつきやお手玉などと一緒に唄っていたが、子守唄としても歌われていたという。もしかしたら、この歌は弔い歌でもあるのではないかと思って聞いていた。

小野さんは、今この歌が身に沁みると言っていた。一人で生きていくのは寂しいが、2人で生きて行けば何とかやっていける。東北の人たちは、子どもの頃から、こんなわらべ歌を聞き、歌いながら、そういったことを身につけていった。災厄にみまわれたときも、こういったわらべ歌を口ずさみながら、時には、この世にはない人の魂ともつながりながら、生きてきたんだなと思った。これからもこういったわらべ歌と一緒に聞いたり歌ったりしながら続けていけたらと思う。



### 平田さな江さん（プロジェクト事務局）

いつもみなさんの声を聴きながら、嬉しく、またこれからも頑張れるなと思う。また来年もお会いしたいです。これからもよろしくをお願いします。



### 新谷真貴子さん（修了生/NPO法人家族・子育てを応援する会理事長）

奈良県広陵町というところで子育て支援や街づくりに関わっている。プロジェクトに何度も参加させて頂き、それをモデルに、広陵町で、団先生の漫画展やトークを毎年やっている。

みなさんの発表を聞いて、時間や空間を超えてこんなに広く繋がって、すごく心強く思った。毎日活動をしていると、どうしても視野が狭くなるが、力を頂いた。それぞれのフィールドでおまた一緒に頑張ってくださいませ。



**張亦瑾さん（修了生/台湾 馨思心身・精神科クリニック）**

東北のみなさんにまた会えて、懐かしく、よかったなと思っている。院生の報告に感動したし、一番感銘を受けたのは、自由の森学園の高校生や、白河EMANONの高校生たちの発表を聞いて、日本には希望があるんだと感じた。

白河は小さい町とおっしゃっていたけれど、今年、甲子園で白河の関を越えたということは外国人でも知っている。東北の魅力は帰国しても忘れられないものです。これからもよろしくをお願いします。



その後のブレイクアウト・ルームでの交流の様子はわからないが、アンケートを見ながら、きっと良い時間を持ってもらったことだろうと思う。

**参加者感想**

以下、アンケートを一部紹介する。

●大変良い時間でした。またこのような企画が次への行動につながるのだと感じています。企画・運営された院生の皆さんに心より感謝いたします。（40代男性）

●この集まりを定期的で開催していること自体に大きな意味があるように思ます。引き続き、活動を継続していただけたら嬉しいです。（40代男性）

●多様な立場からの思いを聞くことができ有意義な時間を過ごすことができました。ありがとうございました。（10代女性）

●新しいプログラムで、より一層学びの幅が広がった感じを受けました。これからも引き継いで欲しいと思いますし、また東北に行きたくなりました。（40代女性）

●開催ありがとうございます。現地の方々の顔を見ると、東北にもう一度行きたいという気持ちが湧きました。交流会も楽しかったです。ありがとうございます。（10代女性）

- ご準備しっかりされたことが伝わってきました。育児中で、オンラインでなければこうしたシンポジウムには参加できないので、貴重な機会をありがとうございました。(30代女性)
- そこに生きる人たちと繋がり続ける大切さや、伝承していくこと、その土地の持つ力を改めて感じさせてもらえました。(60代以上)
- よく「忘れない」と言われるけれど、こうして、実際、人や土地との温かで緩やかな、そして世代を超えてのつながりの大切さを、この取り組みを通じて感じました^\_^ ありがとうございました。(60代以上)
- 17人と、先生方とで話し合いを繰り返し、思考がかきまぜられて、自分のものになっていく過程が体験でき、新鮮でした。ありがとうございました。(50代女性)
- 東日本の現地の方々とオンラインやビデオメッセージでつながり、近況がわかってよかったです。また、昨年と異なる場所に院生達が行き、対話ができるようになっていたことがいいなあと思いました。(40代女性)
- いろいろな立場な方が、いろいろな視点で、震災、復興について考え続けていくことは、これからも震災を語り継ぎ、学んでいく良い機会だと思いました。(50代女性)
- この震災プロジェクトに流れる根幹はずっと変わらないと、2013年から10年、毎年何らかの形で参加させていただき、いつも思います。尽力して運営してくださっている先生方・事務局

局の皆様は心より感謝申し上げます。事前学習をして、現地に行き、見たり聞いたりしたことについて、感じ、考え、自分の言葉で表現することはとても難しいと思います。院生の皆様は、毎年、苦勞して発表をしてくださっていると思いますが、今年のシンポジウムでは、皆様、個々の思いと表現がとても分かりやすかったように思います。

ブレイクアウト・ルームで、自由の森学園の3人の高校生の皆さんが、「この体験を今後どうしたらいいのかについて考えています」とおっしゃっていました。本当に真摯な思いに心打られました。

解決しないこと、理不尽なことに心を痛めながらも考える事に意味があり、後になって分かることがあることに私は気づきました。この震災プロジェクトに10年関わらせていただいて・・・。

震災プロジェクトで体験したことについて思うこと、そして、自分の活動に対して思うことはつながっていたように思います。対人援助をする上で、同情やお仕着せではなく寄り添うこと、震災プロジェクトで現地の方々と何か一緒にさせていただくことの中で見えてきたことがあったようにも思います。現在は、いろいろな課題や答えの分からないことにぶつかることもある自分の支援活動ですが、自分ができることを謙虚に常に考え続ける事、寄り添うこと、分かろうとすること、その姿勢の中で、人がつながり、誰かの事情が見えてくることがあります。それは、震災プロジェクトに参加させていただいていたからだと思います。

今年の17人の院生が、自分のタイトルを付けて自分の思いを伝えていたこと、今後どのように発展していくのが楽しみです。院生たちにこのような場をつくり、考える視点を投げか

け、助言し、発表の場を設けていただいた村本先生始め先生方・事務局の平田さんに心よりお礼を申し上げます。そして、今後も現地の皆様・院生の皆様・新しく参加して下さる皆様とつながっていくことができたらと心から思います。今後もよろしく願います。有り難うございました。(60代女性)

●「私たちの選択が、未来の在り方を決めていく」本当に具体的に思い思いの感性で着眼点は違えども 根底に愛を感じられる発表で私たちが普段忘れがちな一番大切な心の在り方を教えていただけました。(60代女性)

その他、「是非これからも続けていって欲しい」という応援の声を複数頂いた。

## 自由の森学園から

その後、自由の森学園からレポートが届いた。ブレイクアウト・ルームの様子や、院生たちの報告がどのように届いたのかが反映されているので、ここに転載させて頂く。初めの内田さんの言葉は記名入りアンケートの形で頂いたものである。

### 内田一樹さんより

この度はシンポジウムに参加させて頂き、ありがとうございました。自由の森学園の内田です。東北の新しくなった道路や街を見て、また伝承館にあるような資料をはじめ見たときの感想や感じ方は、高校生も大学院生も共通しているなあと感じました。高校生達にとってそう

いう思いを共有する相手が、学園内だけではなく、学外の他者ともあるという意味においてとてもありがたい場でした。生徒達の終了後の感想の中でもそのことが少し出ていました。正直、報告するかどうかの議論を90分行って、かなり賛否も五分五分の中での報告でした。今日報告してくれた生徒の中にも、報告はしたくないと言っていた生徒もいました。それでも、この場を実際に体験、経験したことで得たものは多くあったように思いました。交流会の時間でも、各グループで高校生達に質問をしてもらったり、フィードバックをしてもらったりで、とても貴重な時間を過ごさせて頂きました。一緒に問題やモヤモヤを共有できる相手がいること、そういう場があるということがどれだけ素晴らしいことか。震災の後の復興の過程で、そしてコロナ禍で、その場が東北にせよ私たちの日常にせよどれだけ補償されているのか。その意味でも、今日のこの場が毎年変わらずに開催されていることに感謝の思いです。来年も参加させて頂けたらと思います。

個人的には、廃炉記念館のことを取り上げていた院生さんの「原発の恐ろしさを、使命感にすり替えているだけではないか。それは戦争の兵士となった人たちの怖いという思いを使命感にすり替えていくところに似ている」という言葉に大変共感しました。様々な土地の写真が映し出されていましたが、「舗装された新しい道路と綺麗になった街(あるいは何も無い空間)」は多くあり、共通しているように感じました。新しく上から綺麗に塗り固めていくこと。福島白川の小磯さんが話されていた「表面は復興に向けて明るく前向きに振る舞っていても、どこかその下では不安に思っている」という言葉。院生さんの言葉と新しい景色と小磯さんの言葉が自分の中ではつながっているように感じ

ました。そのような発見が今日はあり、久しぶりに「二重のまち」を引っ張り出して読んでいたところでした。今日は本当にありがとうございました。

## 高校生たち

●自分達が行ったスタディツアーと大学生の方？たちが行った内容がずいぶんと違って、同じ東北について学んでいても場所や見方によってこんなに違うんだと発見して面白かった。

小学校の震災遺構でむき出しになったトイレの写真があって、発表していた方もトイレに人の生活が感じられる、と言って、人間が存在することで日常の家具や物などが生まれているんだなあ、と思った。

災害用の自動販売機があって、なにが売られているのかまでは確認できなかったけど、私的にはこんなに身近にあるものなのに考えつかなかったな、と。あと、全国にどれくらいあるんだろう？って気になった。

学校以外に震災遺構になってるものってなにがあるのかな？家を解体することによって、人々の記憶から震災が薄れていく、という思いが印象に残った。

慰霊碑は個人で作った、という話があったと思うけどたしか門脇小学校の近くにすごく大きな慰霊碑があったからここの違いはなんだろう？と疑問をもった。

森川さんが100年後まで語り継ぐ、という本について話していた。年月にたつにつれ震災を知らない子供達が増えていく、から語り継ぐことが大切だ、と言っていたと

思うけど、個人的に震災ってすごく大きなことだと思うし、実際に勉強してる私でもいまいち実感が湧かないこともあるから体験していない子に語り継ごうとした時、分かりにくいんじゃないかなーと思った。またこの問題はどうやって伝えていけば少しでも分かりやすくなるのかな、と。わたなべさんの末の松山のお話でそこだけは浸水しなかった。それにより、もしその話を聞いていてあそこに逃げようと思う人が1人でもいるなら伝えることの大切さがあると思うと言って、どんな震災だったかを伝えることだけではないんだ、とまた学びが少し深くなった。

わたなべさんが民話のお話をしていて、伝える側と受け取る側がないと民話などは簡単に廃れてしまう、と話していて、語り継ぐ、伝えていく、と今まで言ってきたし聞いてきたけど、そこにはあまり受け取る側のことを考えられていなかったのかな、と少し思った。

でも、受け取る側のことを考えると何なんだろう？さっき森山さんの時に出したけどわかりやすくてことだったり？他にもきつとたくさんあるよなーって感じた。

西川さんの東京電力の職員さんのお話でこの前原告の話を勉強してたから、正直頭がこんがらがりそうになった。あと、誰に怒りを向けているのか？電気を使ってる私たちか？(これは少しドキッとした。たしかにそうだよな…と思った。けど、この思いは失礼になってしまうかもしれないから難しいけど電気はほとんどの人が使っていて、北村弁護士や原告者のちひろさんも使っているなら…と考えた。上手く言えない！) 東京電力か？そのトップか？(また

そのトップとは誰か?) はたまた国なのか?

赤木さんのお話でグループの方たちとディスカッションをしていると問題は大きくなっていき自分たちではどうしようもできない結論に至ってしまうため、なにもしないという結果になってしまう→だからそうじゃなく、私たちができる0.1%のことをしていこうとあってたしかにそうだな、と知れた。問題が大きくなっていった結局なにもしないという部分にすごく共感した。

いしぐろさんがフィールドワークにてガイドさんに言われて初めて気付いたことがあると言っていて私たちも見えていたけど、気付いていないことがスタディツアーもそうだし、日常にもあふれるようにあるんだろうなと思った。これからはそれを少しでも多く汲み取れるようにとも。

尾崎さんが、保育園の園長さんの言葉だったかな? 時間と共に変化しないものは無い、と言っていたとあり、スタディツアーでの記憶が自分も薄れていっているのもあり、ダメなことだと、それと同時に忘れていく自分に悲しい気持ちがあったけど、その気持ちがすこし軽くなった。毎年話すことによって思い出し忘れないでおこうとしている、とも言っていた。これについては忘れないでおくことが今回の話し合いの中でも全体的に感じた。それって辛くはないのかな、とも私は思った。

安井さんは、人が住む場所ができない場所がまだある、同じ場所、時を過ごしているのだから関係ないことではないと言っていた。でも一気に抱えることは大変だから少しずつ小さなものでも関わりをもっていきたいと言っていて、なるほどな、と思っ

た。

それと同時になぜ同じ場所、時を過ごしているのに関係ないことな気がしてしまうのだろうか?

近江さんは、話を聞いてく中で全員がなにかを守ろうとしていた。(うまく言えないけど人の気持ちの部分に触れたような? 聞いたような気がして印象に残った。)震災の全体を知るよりも大切なことがあるのではないかとたしかに共感した。この大切なことが気持ちな面なんだとしたら、大切なことには触れにくくもあるよな、とも思った。

●感想です! オンラインの難しさをとても感じました。その場の空気感が分からないし、声も聞きづらくて、テレビを流し見しているようでした。

私は、途中から途中までしかいなかったもので、最後まで参加していたら、zoomでも溶け込むことができたのかなあとも思います。中途半端な参加の仕方をしてしまって、反省してます。ちゃんと、なぜ発表するのか自分で考えればよかった!!

●主に福島の記事が中心でしたが、各地方の資料館や施設など知ることができてよかったです。

ブレイクアウト・ルームでは、自森について聞かれたり、自分より歳が下の人達や地震を経験してない人にこういう事があったんだよと伝えるのって大切だよな。でも凄く難しいよね。みたいなことを話しました。

こういうシンポジウムっていつ終わるんだろう、いつ終わるんだろう。ってふと

考えた時、自分達の為とかではなく後世に伝える為にも必要で、終わっちゃいけないのかなと思いました。

●色んな人の、色んな視点からの話が聞けてよかった。知らない場所、言葉がたくさんあって、もっと沢山のことを知りたいと思った。

交流会の中で、避難訓練の話があった。その時に、初めて自森で避難訓練をした時のことを思い出した。私が今までいた中学校とは全然違って、みんな普通に歩いて、喋ってて、すごく驚いた。ただの訓練でも、いつ何が起こるかわからないからしている事で、自分を守るために必要なことで、「今まで経験してないから大丈夫。」なんてことはひとつもないから、だからこそしている事だと私は思う。

過去の震災も、原発事故も、甲状腺がんも、みんなが関係ないと思わないで自分のことだと思えたら、一つ一つのことを大切に思って、考えられるんじゃないかなって思った。そのために、もっともっと沢山のことを知りたい。

●シンポジウムに参加して、立命館大学院生や高校生、大人のみなさんなどたくさんの方の外の声が聞けた。普段授業内で交わすことに近いような思いの人もいれば、新たな視点や発見もありいろいろな声が聞けたことが嬉しかった。

交流会では「避難訓練やマニュアルは必要なのか」という疑問について意見を聞いた。立命館の大学院生は現地に行った際、コンサート中という想定で訓練が行われたそう。照明がチカチカしたり、しっかり

腰を落としてしゃがんでと教えてもらったらしい。避難訓練はゆるいイメージがあったので、実際に起こっているときのことを想像しながら行えるくらい危機感があるといいなと思った。「ゆるくても訓練自体はあった方がいい」という意見があり、何が何でも従わなければいけないかはわからないが、あった方が安心するなと感じた。

シンポジウムを通して、私は震災への興味が深まっているのだと気づいた。意外だった。この講座をとるまでは震災を身近に感じておらず「知らないこと」として放置していた。そんな私が思っていることを発したりモヤモヤしたりするくらいに震災について考えるとは思わなかった。今回参加して他者と関わり、何かに繋げていけるのではと学んだ。私にできることは少ないけど、これからも少しずつ考えていきたい。

●いちばん嬉しかったのは、日和幼稚園のバスの事故についてもやもやしていたからそのことについて話したら、意見をくれたこと。立命館の先生と大学院の学生の方が話してくれた。

日和幼稚園は高台にあったから、地震の時保護者の方たちは安心していただけ、幼稚園の先生たちは保護者の元に送り届けることが安全だと判断したから山を降りてしまっただけで、被災し、火事が起こり、翌日黒焦げの我が子の姿を抱き上げることもできなかったという文を見たから、なにが正しいのかってやもやしてた。

災害が起こると、ひとりひとりにとっての正しいことがバラバラになって、判断が難しくなるから、どうなのかなって。そして、小学校でやってるおかしとかのキー

ワードの避難訓練のようなシンプルなやつを掲げるのがいいのかなって思うって言った。マニュアルをたくさん作るのもいいんだけど、シンプルなものをひとつ作り、これを絶対守るってしたらいいんじゃないかなっていった。自森の避難訓練、災害起きたらたくさん行方不明になっちゃう気がする。

自由の森学園の高校生たちの素朴な疑問や感想は、若い人の正直な感性が現れているようでいいなと思う。大人たちの期待に応じて反応するというのではないありかたを学園では鍛えられているのだろう。院生たちの発表を含め、未来を支える若い人たちのこれからが楽しみである。

つづく